

汪曾祺講演会のことなど

93年 / 春 / 北京

釜屋 修

○ 中国の作家たちがどんな表情、どんな姿であられるか、直接会う時、会った後の「回味」の楽しさである。早春の北京で待ちあわせた陸文夫氏は青いカーディガンにレンガ色のネクタイ、その上から絹のグレイのジャンパー。人民代表大会のさなか、日程の空きをみてシャングリラホテルまで出てきてくれたが、大会でもこのスタイルなのだろうか。会う前に見た写真の中にもこのジャンパー・スタイルが何枚かあった。本人も自ら優秀な機械工だったと認める、作家らしからぬともいえるスタイルで、実直がジャンパーを着ているといった感じ。胡風記念展示会開幕式であった人たちは、式典ということもあってか、また年輩者が多かったせいか、みんなきちんとしたスーツ姿が多かった。周而復氏は淡い茶色にグレイのストライプの入ったスーツに赤っぽい斜めストライプのネクタイ。李準氏もシャレたグレイに白い線の入ったシャツに濃い茶色のネクタイ、上着は取っていた。胡風夫人の梅志さんは焦げ茶地に赤、青、白の小さな木の葉を散らしたブラウス、グレイのスラックス、辛酸をなめつくした人の穏やかな笑顔は美しい。雷加氏はエメラルド・ブルーの半袖に黒いショルダー・バッグの軽装。それに比べると若い作家たちはもっとラフだ。別の日、北京大学南門で待ちあわせ、私より先に到着していた格非は細かい幾何学模様の入った、遠目には無地に見えるワイン・レッドの半袖、余華を伴って「面的」から降り立った劉毅然は白地に英文字と抽象模様を散らした派手なTシャツが映える。余華はみんなから「和尚領」とからかわれたライト・ブルーのダブダブのTシャツにサンダル。同席の評論家白烨氏は白いポロシャツ、王中忱氏は白いカッターシャツ、作家と評論家はみごとに好対照。また別の日の呉濱氏は鮮やかな青のポロシャツだった。陳建功氏は、北京大学に講演に現れた日、黄色に黒の縦縞の走った長袖シャツ、司会の孫玉石氏がネクタイ、スーツ姿なのを見て「孙老师是我最尊敬的老师，我走的时候还没当官儿，现在当官儿了。今天我没带领带，实在对不起……」と笑わせた。孫氏笑いながら慌ててネクタイを外して会場おおいに沸く。太原に訪ねた山西の老作家孫謙氏は広い二階の書斎でなにやら資料を探していたが、グレイ地に赤と青の線の入ったシャツに黒いベスト、補聴器を耳にお元気で、東京での思いがけなかった再会、

広島の思い出、娘のいるアメリカ行きの印象などを語ってくれた。その他山西の諸氏、胡正、焦祖堯、董大中、李国涛（作家としては高岸の名を用いる）、成一、陳玉川氏らが白一色だったのに対し、周宗奇、王碩之氏はデザインに工夫のあるシャツ、李銳氏はワイン・レッドのシルクのシャツだった。そのほか、白石橋の自宅に何度か訪ねた梅娘さんもその都度色鮮やかなプリント地のワンピースだった。1960年、若き大江や開高らが亀井勝一郎などと訪中した時の写真集（『写真・中国の顔—文学者の見た新しい国』社会思想研究会出版部・現代教養文庫298、1960）と比べてみる時、言わずもがなながら、時代の大きな変化を実感させられる。

1 汪曾祺氏に会ったのは、北京大学中文系95周年「校庆」「校友」作家連続講演会第一弾（第二弾が陳建功、第三弾は中止）、93年5月10日の夜、体育中心二楼会議室だった。司会は中文主任の孫玉石氏。現れた汪曾祺氏、少しくたびれたグレイのスーツ、紺地に白い斜めストライプのネクタイ、白いYシャツの袖口の折り返し部分をなぜかさらに半分折り返してある。金剛の腕時計。氏と北京師範大学の王富仁氏は「烟鬼」で有名。知識人愛用の紅塔山をひっきりなしに吸う、その灰が服にふりかかるが無頓着。

2 ■謝冕さんから電話があって「随便聊聊」ということだった。「校友」とは言え、実は西南聯合大学中文系で卒業はしていない（『文学家辞典』の類は多く「卒業」としている）。最後の除籍学生である。勉強はせず、「著名的不好学生」で「看书看到天亮，白天不上课」。聞一多先生が宋詩の講義をしていたが出なかった。沈從文先生は文学院長だった。文学理論や文学史など系統的なものは作家になる者には関係がない。したいことをし、したくないことはしない、作家にはこれがたいせつで、そうしてこそ自分の風格が出る。作品を見ると、別の、自分にきわめて近いもうひとりの自分が出てくる。

■私の作品はチェーホフの影響をいちばん多くうけているが、アソリン（1874-1967 ス페인、隨筆体小説の創始者）の作品が私には適している。ほかに、アルフォンヌ・ドーデ、今ではもうみんな読まないだろうがソ連のアントノフ（セルゲイ・ペトロヴィッチ、1915-）など、身近に感じる。

■なぜ作家になったのか。なんでも見てやろうと思っていて、小さい、小学生の時から町の通りのすべての店ひとつひとつに興味をもっていった。羅宇屋や「竹筴子」を編む店など、食事時になると家の者が私を探しにくるのだが、い

つもじーっとそんな店を見ていた。今でもそれらの店の色彩や雰囲気覚えてる。いつか故郷（江蘇・高郵県）へ帰った時「布店」の裏「档幕兒」に書いてある白い漆地の上の青い文字「□□□□□……」（いやいやこれは聞きとれない、かなり長い）を覚えていてそらで読みあげたら店の人がびっくりしていた。今は「我的记性越来越不好」で今日のことも明日は忘れる、電話番号、「門牌号码」などその時はしっかり覚えているのだが、電話などいざかけようとすると忘れてる。しかし「若干年」前のことはよく覚えている。

■生活の美につながることに敏感である。作家は一般の人がうまく言い表されない（说不得）「生活的感受」を敏感に見なければならぬ。作品にはその思想がなければならぬ。何年か前にある青年作家が思想はいらないと言ったが、それには賛成できない。ただ、思想といっても、一般に言う政治的な、「学习文件」的な思想ではない。作家自身の生活に対する独特な見かたのことである。この点では毛沢東の言った「□□□□…」（ウーム、また聞きとれない、毛思想学習不足だ！）は正しい。人は往々にして何かに出くわして感動を感じる。が、果たしてその中にほんとうに深みのある「内涵」があるかどうかを考えなければならぬ。

■私にはごく短い『職業』という作品がある。「人民文学」、まだ劉心武がやっていた頃の「人民文学」に出した（注1）。劉心武はたかだか1000字にも満たないものに『職業』という題名は大きすぎると言っていたが…。描いたのは子どもだ。毎日朝晩にWénlión街である子どもを見かける。食べ物、たいへん安い食べ物売っている。当然学校に行っていなければならない児童なのに、そうして「養家」している。（汪氏はここでその子の「叫卖」の口まねをしてみせた）ほかの子どもたちがその子のまねをして（やはり口まねする）はやしたてるがその子は「学就学吧」という態度。家には母親がいるのに、小学5年から6年でこんな「職業」についている。しかし、こんなふうを書くだけではあまりにも無味乾燥だ。Wénlión街にはいろんな「叫卖」が通る。「收破烂」の音がいちばんよく通る。（まねてみせる）「叫得非常响」、遠くからでもやってくるのがわかる。もう一人しわがれ声の老人（まねる）、貴州人の売り声だ。それに苗族の女の子の「玉米饼子」売り、貴州では「玉米粑粑」というが、頭には□□をつけて……（苗族の衣装についてくわしい説明、続いて口まね、やはり聞きとれない）ところでその少年、露地に入って左右に人がいないことを確かめると他の子どもが自分をからかった時の声をまねてみせる。自分で自分を罵るのだ。ユーモラスではあるが「痛苦」からきたユーモアだ。

■『虐猫』という作品がある。(いやいやこれは私が『北京文学小景』という文学テキストに選んだ作品、その裏話がでる、とやや興奮) 文革では大人は子どもの遊びに気を配れなくなった。それでもはじめは気を配っていたのだが…。子どもたちは猫の髭を抜いたり、めちゃくちゃな遊びを始める。プラスチックの葉ビンのフタ(ウム、プラスチックだったか。小生のテキストの注では「金属またはプラスチック。ここは金属のほうがよく滑るであろう」とした、許されよ、汪氏ならびに読者諸氏)を猫の足につけて滑らせたり…。猫というのは2階や3階くらいからなら落とされても平気。しかし6階となるとダメ、その6階から子どもたちは猫を落とす。文革の非人間性を描いた。(これだけでは意味がない、ということだろう)その後、子どもたちの一人の父親が6階から飛び降り、子どもたちは猫を落とすのをやめた。「人心还有希望，孩子们知道这个道理」を描きたかったのだ。

■いつか『聊斎』のパロディを書いたことがある(杭州の美女と書生の愛情、額に黒点を打たれそれを愛の力で消す話のようだが、古語?の引用多くよくわからない。注2) こういう中に私の言う思想、生活の美に対して自分の得意な角度から焦点を絞っていくという態度があるのだ。(このあたりで灰皿に手を伸ばした私は不覚にも汪氏の湯飲みをひっくりかえしてしまった。高峰秀子が長い床机の端に腰掛けていて立ちあがったとたんもう一方の端にいた大先輩原節子をもののみごとひっくりかえしてしまったが、高峰は茫然となにも言えなかったというデコちゃんの思いで話を思い出しながらテーブルを拭いていると向かい側からハンカチが飛んできた。関西大学西川氏の機転だった。謝謝)

■汪氏は平然と話を前へ進める。生活に対する独自の見方、思想以外に、長期にわたって学ばなければならないのはことば、あるいはことばに対する敏感さである。以下は前に図書館でしゃべったことだが、聞いた人がいるか? いたらもう一度聞いてほしい(ここで何本目かのタバコに火をつける)。

■言語の特性は、内容性。文学の第一要素である。ことばは形式だと言う人がいるが私はことばも内容だと思う。聞一多は25歳の頃すでに問題提起をしている。文字は形式・手段ではなく、そのものであり目的である、と。言葉、内容、思想、この三つは同時存在するものできり離すべきではないし、きり離せないものである。スターリンの言語論も、一彼の政治的、全般的評価はともかく一この点では正しい。「没有语言的思想」もないし、同時に「没有思想的语言」もない。(うん、スターリン言語学における言語の階級性を汪式に解

積しなおしたのか?)よく「这篇小说不错,但语言有点儿差」などと言うが、そんなことはありえない。ことばのよくないものでいい作品なんてありえない。最後に残るのはことばなのだ。しかしそれ以上のことは私にはわからない。哲理的文学などという形而上学的なことは私にはわからない(このあたりから汪氏しきりと時計を覗き始める)。

■言語の文化性。ことばは一種の文化現象だ。一人の作家の作品のことばのよしあしはその作家の全体的文化性を決定する。作家の読書は「写文件的人」とはちがう、言語に注意するのだ。農村から出てきた人でもいい人はいる。孫犁、はじめはあまり本を読んでいなかったが、後からよく読んだ。趙樹理はなぜうまく書けたか。中国の文化は書面文化と口頭文化とに分かれる。趙樹理は「农村才子」だ。山西梆子をたくみに唄うし、口でドラム、指で机をたたいてリズムをとる。『赶车传』を『石不烂赶车』に改編したが、改編したもののほうがもとのよりいい。改編したものの冒頭が実に詩的だ。こうした口頭文化の伝統はきわめてたいせつな財産である。何年間か「民間文学」をやっていたたくさんの方の民間歌手と知りあったが、みんな「了不得」な天才だった。(この後、汪氏のみごとなパフォーマンス。山東の「普通老百姓」のユーモア/蘭州民歌のせりふまわしのおもしろさ/湖南劬陽民歌、第一行目は哲学的、二行目は普通、三行目は「伟大」、と唄いながら小生の同意を求める。唄っている民歌の意味がわからないから頷きようがない、小生おおいに困る)。そして全体としては「現代主義」だ。

■それからことばの暗示性。字面には表れないもの、例えば新疆を描いた周□□のもの、……(いや、もうわからない)。要するに少ない字でも読む人に多くのものを連想させるものことだ。

■流動性。いいことばは生きたもの。停まることなく転変し、あちらこちらと流れて行く。「想一句写一句」などと言う人がいるが、それはダメ。全体を流れるように統御し、「一句」と「一句」の関係をつなげる。「一句」「一句」がよくても「句」と「句」の関係がないとダメだ。一字一字が貴重なのはあたりまえだが、その上、「一笔到底」でサッと書きあげるのがいい。

③ また時計を見ている。状況判断した孫氏が学生たちに質問があれば「紙条」に書いて提出するよう指示。断続的に十数枚が汪氏の手許に届く。老眼鏡をとり出して眺め、フーッと溜め息。以下、私が理解できた質問者と汪氏のやりとりのメモ。(Q=質問者 W=汪曾祺。質問状は見えないの

で頭に？を付したものは汪氏の回答から推測した内容)

Q (口頭質問) 小説の「结构」についてどう思うか。(孫氏、「問題不大」と発言)

W 天津でもいつかそんなことを聞かれて「随便」と答えたら相手が怒ったので少し補足したことがあった。つまり私が言うのは「苦心经验的随便」なのだ。伝統的には「無端緒的端緒」なのだ。「开头」の「楔子」とおしまい「结尾」が大切だ。「结尾」は二つの型が可能。サッと終わるのと、「逗」して情緒たっぷりに終わるのと。しかし「奥妙」であってもよくないものもある。O.ヘンリーの「结尾」でも「很有奥妙」なのだが「不一定会很好的」。

Q (?中国の将来について)

W 「我也遭到了许多坎坷」しかし私は楽観主義者だ。中国の将来はきっと希望がある。湖南省の若い作家が若者の「失落感」を描いたことがあって私は短い評論を書いた。彼のその作品は実際は「幸福感」を表しているのだと。

Q (?なぜ長篇を書かないのか)

W 我没写过重点小说, 也没写过长篇小说。最长也一万几千字。长篇小说是另一种思维方式, 我不熟悉, 没写过。

Q (?王朔をどう思うか)

W 王朔此人并不是世上所说那样不好, 他对我来说是个孩子, 顶可爱, 侃侃是年轻人的特权。

Q (?カラオケについて)

W 卡拉OK (汪氏の発音がたどたどしい)、受不了、太噪人(嘈人?)!

4 また時計を気にする汪氏。独り言のようにして、私は「高楼大厦」に住んでいるので遅くなるとエレヴェーターが停まってしまう、と言う。8時35分だ。孫氏がそれを大声で学生に伝え、閉会の辞に移る。緩急をつけ、声の高低をうまく使い分けてのみごとな演説口調、日頃の静かな孫氏の語り口とはちがい、メリハリのきいた、主任の声である。

■ 我知道今天也有电影, 有的同学去看电影, 是一个选择, 你们不去看电影, 也是一个选择。毕业后, 离开北京大学之后, 你们一定会想起北大95周年的这个晚上来! (鼓掌) 纸条里有一大部分人讲到怎么评价沈从文这个问题, 很大的问题, 但这一点还是我们自己去研究, 好吧! ……汪老师最后讲到王朔, 那是对年轻人的

愛和保护! ……再次以鼓掌来感谢校友!

学生が拍手しかけると、間髪をいれず汪氏が元気な声でアジ。「你们承认不承认我是校友?」学生も「承认承认!」と応じ、西南聯合大学中退生は北京大学「校友」と認められた。仄間では清華大学でも「校友」とのことである。

5 汪氏の著作を手サインを求める女子学生に気さくに署名している汪氏の手許を覗きこむと「旧友」などという字が見える。会場を出る汪氏と歩きながら話す。趙樹理とは「民間文学」編集でしばらくいっしょに仕事をしたという。すっかり暗くなった北京大学のキャンパス、会場入り口で記念撮影。残念ながらこの時の写真は写らなかったと後から撮影者に聞いた。聴衆のひとりでもあったにちがいない、出版社か新聞社の若い人が二人、車で汪氏を送って行くという。汪氏が「你住在××, 绕一大湾儿了」と言うと若者の一人が「没有, 没有, 我想认识认识你的大門儿」と答えている。へえ、こういう如才のない表現もあるんだと横で感心している。別れのあいさつと握手の時汪氏の口から出てきたのは「SAYONARA!」だった。

(補記) テープ・レコーダーは使用せず、ノートのメモによった。どこまで正確かはなほだおぼつかない。さいわい汪曾祺氏の小説集、散文集は数多く発行されている。参照されたい。また、この夕べには会員の西野由希子さん、久米井敦子さんも参加されていた。ご叱正を乞う。

(注1) 汪氏のいう時期の「人民文学」には見当たらない。

(注2) 「人民文学」1988年3期に「《聊齋》新義」として四篇のパロディがある。

文 芸 報

《赵树理全集》出齐

1995年7月1日

本报讯 为了全面、准确地展示赵树理文学创作的成就, 给广大研究者提供翔实的资料, 山西省作家协会自1986年起, 组织人员编辑《赵树理全集》, 由北岳文艺出版社出版, 至今年5月全部出齐。

《赵树理全集》共收入作品470篇, 约210万字, 将迄今搜集到的赵树理所有作品, 以及讲话记录稿、书信、与他人合作作品, 全部编入, 并作了详细的注解和校对, 为研究作家的思想和作品的艺术性, 提供了翔实的资料。(杨品)